一九六八年の戦争と可能性

アナキズム、ナショナリズム、ファシズムと世界革命戦争

千坂恭二

パリに保存されている文明の計測器を規準にして我々を測ると、それは我々が負け戦を最後まで負けることを、ニヒリスティックな行為を不可避の極点に到るまで完遂することを意味する。我々は長きにわたり魔術的零点に向かって進んでいるが、この点を越え、さらに先に進むには、もう一つの見えざる力の源泉に到らねばならない。かくして魔術的零点を越えて存在するものは、ヨーロッパを規準にしては捉えられない。それ自身が規準なのであり、我々の希望はそこに向けられ、結びついているのである。

エルンスト・ユンガー『冒険心・第一稿』

序

一九六八年という言葉と共にとりあげられる全共闘運動については、すでに多くの著書や文書があり、その歴史や思想から体験まで様々なことが論じられ、語られてきた。しかし、それらの著書や文書の筆者は、多くがかつての全共闘の委員長であったり、あるいは党派の指導部クラスなど、いわばリーダー・クラスの人たちであった。また、日本の出版メディアは東京一極集中的であることから、もっぱら東京の大学や活動のことが語られるばかりだった。さらにいえば、全共闘運動はノンセクトだが新左翼的な運動でもあったことから、戦後世界の左翼運動をリードし理論的基盤となったマルクス主義あるいはマルクスの理論や言葉をベースに論じられた。ということは、当然かもしれないが、リーダー・クラスでない者による、非東京的な、非マルクス主義的な全共闘運動については、ほとんど語られることはなく、ましてや論じられることはなかったということでもある。

むろんすべてではないが、多くの全共闘関連論議の一面性とでもいっていい側面とはつまるところ、全共闘の特質とされたノンセクト性が語られないということでもあるだろう。ノンセクトとは、これまで通常では政治的

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 124 08.10.3 1:54:10 AM

無党派、つまり新左翼系のセクト（党派）のどれにも属さないというように理解されてきたが、それだけに集約されるものではない。上述したようなリーダー・クラスによる東京中央的で、マルクス言辞的なものは、いかに党派的にはノンセクトであろうとも、ある種の定型性を帯びており、それ自体が「ノンセクト」性そのままに無自覚なセクト（党派）であったりするのだ。もし、全共闘の特質であったノンセクト性を、単に政治的党派からの独立性というだけではなく、思想や理論、活動から存在における独立性と解するならば、これまでの諸般の全共闘論によっては、語られなかった（あるいは語ることが出来なかった）全共闘があり、そしていうならば、このことこそがもう一つの「一九六八年」の問題でもあるといえよう。

一九六八年については、すでに絓秀実による精力的な史論（『革命的な、あまりに革命的な「１９６８年の革命」史論』『１９６８年』など）があり、「六八年の思想」については余すところなく述べられている。私もまた「日本における六八年革命は、それを体験した六八年世代の者からさえ、いまだに「挫折」といったイメージによって語られている」（『革命的な』）ことに疑問を感じており、小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉 戦後日本のナショナリズムと公共性』における六八年の過小評価には疑義を呈せざるをえない。絓もいうように六八年が「ロマン主義的反抗とその挫折」にすぎなかったのならいざ知らず、六八年は単なる自我高揚のロマン主義的反抗ではなかった。絓は正しくも「六八年が今なお持続する世界革命であるとは、それが圧倒的な「勝利」以外の何ものでもないということなのだ。六八年への批判が必要だとすれば（実際に必要なのだが）、それは何よりも、その勝利を「挫折」と見なさせてしまう歴史的な光学に対してであり、その今日的な帰趨なのである」（前掲）という。私は、六八年は、自我高揚のロマン主義的反抗に留まらず、歴史的根拠をたどり得る運動であったと考えており、それは「戦後」に対して日本の「正史」回復を可能とする運動でもあったのだと捉えている。それに関連して、以前に「戦後の民主主義を経験した反戦後の運動という側面において、私は、六〇年代末から七〇年にかけての全共闘・諸党派の運動は、理論的にはマルクス主義やアナキズムの言葉が用いられたが、本質的にはプレ・ファシズム的なものだったと考えている。そしてプレ・ファシズム性こそが、この運動の最大の思想的遺産でもある。つまりファシズムの自己肯定を経過しない思想は、この運動以降には到達出来ないということでもある。ファシズムの自己経験のない反ファシズムは、最悪のファシズムの前身でしかないだろう」（「日本的前

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 125 08.10.3 1:54:11 AM

衛とアジア的大衆　アジア主義の革命と戦争」『情況』一九九七年八・九月号）と、やや挑発的に述べたことがあった。これは内田良平と彼の率いた黒龍会のアジア主義が、アジア解放に対する否定的媒体として日本の戦争の、つまりアジア解放の尖兵にもなる弁証を述べたものだった。さらについ最近、赤軍派の革命戦争と軍の構想に触れて「日本の戦争（所謂「大東亜戦争」）そのものを革命戦争として把握することも可能だろう」と述べ、「日本の戦争を革命戦争として把握出来ない立場は、帝国主義者やコミンテルンの支店や手先にはなり得るだろうが、革命派にはなりえまい」（「連合赤軍の倫理と時代」『情況』二〇〇八年六月号）と書いた。全共闘のファシズム的可能性や、日本の戦争を革命戦争と捉えることなどは、左翼的な前提ばかりか右翼的な常識からも逸脱していたのではないかと思われる。おそらくあり得べき誤解あるいは無理解の要因はファシズムの問題だろう。戦後、ファシズムは非難用語として使用され、非左翼的なもので否定すべきものは何であれファシズムと呼ぶ、ずさんというか、精神的に荒廃した状態が続いている。またマルクス主義者は、パブロフの犬的に自分たちを反ファシストだと思いこみファシズム批判をするが、ドリュ＝ラ＝ロシェルの「ファシスト社会主義」に擬えていえば、思想としての「ファシスト共産主義」も「ファシスト・マルクス主義」も可能だということを認識すべきだろう。少なくとも全共闘運動は、意識的ではなく、まだ無意識的で不十分だったかもしれないが、その萌芽くらいは拓いていたのである。二〇世紀は、帝国主義、スターリン主義、ファシズムの三巴戦だったが、現存秩序の改変を志向したファシズムに対して、現存秩序維持派の帝国主義とスターリン主義は結託して、ファシズムに犯罪の烙印を押し、戦後において弁護不可の終身禁固刑とした。帝国主義とスターリン主義を相手に「反帝・反スタ」の世界戦争をしたファシズムに対して、「労働者国家の擁護」などという寝ぼけたことをいったトロツキーはいうまでもなく、ファシズムの思想的オルグも出来なかったトロツキズムなどは下手な三文政治文学以上ではあるまい。帝国主義のネオコンに加入した元トロツキストなどという構図こそトロツキズムの何たるかを示して余りあるだろう。かつて丸山眞男は、バリケードが解除された後、全共闘によって破壊された自分の研究室を見て「ナチスよりもひどい」というようなことを口にしたと言われ、またドイツ（当時は西独）の一九六八年においてフランクフルト学派の第二世代とされるユルゲン・ハーバーマスが学生たちに対して「左翼ファシズム」と批判したことが伝えられたりしたが、これらのことはある意味では示唆的だろう。つまり「ナチスよりもひど

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 126　08.10.3 1:54:12 AM

い」ことをした現代の「左翼ファシズム」とは何なのかということである。

一

一九六八年は、いうまでもなく一九六七年の翌年であり、一九六九年の前年である。しかし、これらの数字は、単に年月を表すだけのものではなく、時代の精神や思想をも表している。簡単にいえば、一九六八年とは、一九六七年と一九六九年が「共存」しえた年だった。一九六七年は、一〇月と一一月の二度に渡る佐藤首相の訪米阻止のための羽田闘争があり、ブント、中核派、解放派による三派全学連がヘルメットと角材で機動隊と衝突したことが有名だが、全共闘の「前夜」の年とでもいえよう。一方、一九六九年は、一月の東大の安田講堂攻防戦にはじまり、各派が「決死隊」を編成した一一月の佐藤首相訪米阻止闘争で終わるが、全共闘の「決戦」の年でもあった。つまり、一九六八年が全共闘の「全盛」の年とするならば、一九六七年はプレ全共闘的な年であり、一九六九年はポスト全共闘的な年のはじまりだったともいえるのである。一九六七年における「全学連」、一九六八年における「全共闘」、一九六九年における「決死隊」という運動主体がそれを象徴していよう。

全学連と全共闘は、「全〇〇」と似たような三文字によって表記され、後年、つまり現在の人々には、違いが分かりにくいかもしれないが、簡単にいえば正反対の内容を持っている。全学連（全日本学生自治会総連合）は、個々の大学の自治会の連合体であり、全学連のよく知られた行為としては一九六〇年の反安保闘争における国会突入が有名だが、全学連は六〇年安保を象徴するものともいえよう。それに対して全共闘（全学共闘会議）は、戦後の大学の自治を批判（「ポツダム自治会粉砕」）して各大学に登場した任意の組織体であり、全学連が目的としたものを批判し、否定する立場で、一九六八・六九年の全国学園闘争の主役的存在だった。「決死隊」とは、全共闘やその内外に存在した新左翼諸党派の決戦部隊のことであり、全共闘や新左翼の最終局面での最前線部隊とでもいえようか。

一九六八年における「全共闘」とは、六七年の「全学連」的なものと、六九年の「決死隊」的なものが共存していたともいえるが、共存出来たということは、いうまでもなく、六七年の「全学連」的なものと、六九年の「決死隊」的なものは異質であり、場合によっては対立的でさえあることを意味しよう。むろん、そのような異質性や対立性は、全共闘運動の時代には顕在化することはなく、これまでの全共闘論議の多くにおいては、この六八年の全共闘を形成した「全学連」的なものと「決死隊」

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 127　08.10.3 1:54:12 AM

的なものとの異質性や対立性については無自覚であり、とりあげられることはほとんどなかった。しかしながら実は、全共闘そのものの内部にあったこの異質性と対立性こそが問題なのであり、それこそが問われる必要があるといわなければならない。

一般に「全共闘世代」なる言葉があるが、実際のところそのような全共闘を統一的に語るような世代などあったのだろうか。全共闘世代と重なるものに「団塊の世代」という言葉がある。それは別名ベビーブームの世代であり、戦後に戦地から大量に復員してきた男たちが結婚して生まれた子供のことであり、公的には一九四五年―一九四九年の間に生まれた者を、ベビーブームあるいは団塊の世代というらしい。私は一九五〇年生まれであるから、厳密にはベビーブームや団塊の世代ではないということになるが、父親は敗戦の翌年の一九四六年に中国大陸の戦場から帰還しており、小学生の低学年の頃は教室が不足していたため二部授業が行われており、中学では一クラスが五十名ほどで、それが二〇クラスあり、ベビーブームや団塊の世代とはまったく変わりはない。現実にはベビーブームや団塊の世代の延長に位置するのだろうが、それでもポスト団塊の最初の世代になるというのは、自分の境遇を考える上でも象徴的な気がしないでもない。

六〇年の全学連と六八年の全共闘の違いについては、絓秀実の一連の一九六八年論が詳述しているが、そこで述べられている簡単な事例を引き出せば、六〇年の全学連は学生服を着ていたのに対して、六八年の全共闘はそうではなかった。全共闘にとって学生服に象徴されるものは否定すべきものであり、そして六〇年の全学連の学生服に対する六八年の全共闘はジーンズ（当時の言葉ではジーパン）だった。現代の大学のキャンパスにおける学生たちの風俗の基本を作ったのは六八年の全共闘であり、現在の大学におけるキャンパスの光景は、政治や思想を別にして全共闘の風俗が日常化したものといってもさしつかえないだろう。

小阪修平は「たとえば全共闘運動の経験自体が、どの時点で大学に入ったかという入射角の違いによって大きく異なる。まだ運動がはじまる前に入学したぼくのような世代と大学に入ってみればもうそこはバリケード（大学を封鎖するために積み重ねられた机や椅子でつくられた壁。転じて、ストで大学を封鎖すること）のまっただなかであった世代では、それこそ経験したことが違う」（『思想としての全共闘世代』）と書いているが、全共闘運動参加者の年齢をみるならば、一方に大学助手や院生がいるかと思えば、他方には大学浪人生や高校生がいる。これらは人間の二十歳前後の成長過程の面からすれ

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 128 08.10.3 1:54:13 AM

ば、同一の一括出来る世代とはいえないだろう。大学助手や院生は二十代半ばかそれ以上であり世間的には「大人」「成年」だが、浪人生や高校生はほとんどが十代であり「子供」とはいえないまでも「未成年」である。私は、これまでも時に応じて、全共闘における「年長世代」あるいは「年長組」と、全共闘における「年少世代」あるいは「年少組」という言い方をしてきたが、大学助手や院生、さらには学部の上級学年生は年長世代、年長組であり、学部の下級学年生から浪人生や高校生は年少世代、年少組といえるだろう。そして先に述べた「一九六七年」や「全学連」性を担うのは、全共闘の年長世代、年長組であり、それに対して「一九六九年」や「決死隊」性を担うのは、全共闘の年少世代、年少組であるということだ。

この全共闘の年長派と年少派の違いは、年長派は、全学連的意味での「左翼的」立場にあるのに対して、年少派は、いうなれば「脱左翼的」でもあるところにある。年長派は、全共闘運動の前に大学に入学しており、「理論学習」などでそれなりの世界観を持ち、いわば自己を確立してから全共闘運動に参加したとすれば、年少派は、全共闘運動の中の「闘争体験」で世界観を形成し自己を確立したといえよう。当時は数年違えば別世界といわれていたことも付け加えれば、この年長派と年少派の自己確立のズレはかなり大きいといわなければならない。また運動の現場においても、年長派はより「理論的」であり、世界観形成の途上にある年少派はより「行動的」（場合によっては、当時の言葉でいえば「単ゲバ」的）であるだろう。つまりは、年長派がより本質的で、その意味では左翼理想主義的でヘーゲル主義的だとすれば、年少派はより実存的でニヒリズム的でニーチェ主義的だともいえよう。一九六八年とは、このようなヘーゲル的な「理想主義的左翼」の全学連的な年長派と、ニーチェ的な「ニヒリズム的脱左翼」の決死隊的な年少派が、同じバリケードや同じ隊列で共存出来た時だったのであり、所謂「全共闘世代」という語は、このあえかな共存を意味するものにすぎない。

ところで、これまで、このような全学連的・ヘーゲル主義的な年長派と決死隊的・ニーチェ主義的な年少派の違いと、思想的な内戦的対立性が顕在化しなかったのは、全共闘論の論者たちがもっぱら年長派だったことによる。全共闘運動が終わるや年長派には、確立され、戻るべき自己や場があり、全共闘時代の思想を維持したまま研鑽を重ね、大学教員になったり、作家や評論家から予備校の講師などになり、一昨日の全共闘をふり返り、省察を加え、論述することが出来たのである。それに対して年少派は、年長派的な意識や感覚の者は大学院

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 129　08.10.3 1:54:13 AM

に進み、年長派の後を追うような形になるが、ほとんどが学部卒であり、熱烈な活動家だった者ほど大学中退か除籍であり、また高卒や高校中退の者も少なくなく、さらに自己形成の場でもあった全共闘運動が終わったことから、場合によっては精神的な喪失状態となり、行き場を失い、路頭に迷い、今でいうフリーターとなり、金融や風俗、イエロー・ジャーナリズムその他のヤクザ稼業に従事するか、喪失状態を突破するための養生が第一となり「引きこもり」のようなものになったりする。全共闘について多くを語った年長派に対して、自己確立の途上で現実を失った年少派はまだ自己の言葉を持たなかった。これが、これまでの多くの全共闘論において、全共闘内部の年長派と年少派の相違と対立や、年長派とは異なる年少派の問題が述べられなかった理由である。年長派の手になる全共闘論の中には、年少派そのものが存在しなかったのであり、そして全共闘を知らない後年の者は、年長派の著作や口述を通じて全共闘に接し、知ることとなり、その結果、年少派の欠落した一面的な、そしていってよければ年長派に都合の良い（つまり年長派の全学連的で左翼イデオロギー的な思想的感性によって脚色された）全共闘イメージが、後の者たちの学習的理解と受容という形を通じて再生産され続けることになり、現になってきた。全共闘の意識の左翼イデオロギー的理

東京都文京区本郷 2-4-13 **白順社** Tel.03-3818-4759 Fax.03-3818-5792［価格は税別］

【血と薔薇文庫】
ブランヴィリエ侯爵夫人
中田耕治 ★1900円
ルイ14世治下のパリ、妖艶・美貌の貴婦人が織りなす優雅・官能・甘美に包まれた毒殺劇。澁澤龍彦『毒薬の手帖』を飾った侯爵夫人36歳が火刑の炎に焼かれてゆく……、エロス溢れる評伝文学。解説・田栗美奈子

盗賊論
神山圭介 ★1900円
オイディプス王からジャン・ジュネまで、「盗賊」という存在の不思議な魅力とその思想を文学的・歴史的に辿りながら、蠱惑の異境界へと誘う。1959年現代思潮社版、1976年出帆社版の完全リメイク。

血と薔薇
35年の時空を超えて甦る【澁澤龍彦伝説】の幻想世界。
60年代日本文化が生んだ最良の頭脳と感覚が凝縮している（朝日評）
全3号復原
11000円

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 130 08.10.3 1:54:14 AM

解は年長派の立場にすぎず、年少派では、その無意識において左翼イデオロギーの「神」は死んでいた。その意味で年少派は、たとえマルクスや左翼の言葉や思想を口にしていたとしても、その政治的無意識は脱左翼、脱マルクスの革命派だったのである。誤解を恐れずにいえば、年長派はその左翼的理想主義においてスターリン主義的旧左翼への回帰の可能性を持つ左翼であり、年少派はニヒリズム的な脱左翼革命派としてファシズムへの可能性を無意識的に保持していたといえよう。むろん、個別的にはそうではないという年長派や年少派に属す人もいるだろう。あるいはむしろそちらの方が多いかもしれない。しかし問題は平均的な量ではなく特異な質なのである。

二

ところで、このような問題は客観的に述べられるようなものだろうか。つまり、一方の年長派の立場と、他方の年少派の立場を比較して、どちらにもくみしないような視点である。すでに年少派の発言がそれなりに蓄積されているなら、それも可能かもしれないが、年少派の発言のようなものはこれまでなかったことから、客観的というより多分に経験的なものにならざるをえないだろう。

私は、これまで述べたことについていえば、リーダー・クラスの年長世代ではなく、決死隊的な年少世代であり、活動の場は東京ではなく、大阪や京都（「畿＝首都」の「内＝圏」つまり「畿内」という大阪が首都であった大化改新の頃の地域区分の言葉をルーツとする「近畿」という名称の、もはや中央でもなければ、純然たる地方ともいえない第三の地域）で、高校生・浪人生の頃に活動し、また思想的にはマルクス主義ではなく、総破壊を主張したバクーニン主義的なアナキストだった。「極左」の革命派だったが、同時に「反共主義」（マルクス主義的な共産主義の否定）という実に不思議な、当時の多くのマルクス主義者には理解し難いと思われるような、一九六八年の珍しい〝天然記念物〟的な存在でもあった。

アナキズムは戦後左翼の運動史においては周辺的な存在であり、脚光を浴びるようになったのは一九六八年だった。フランスのパリ五月革命の時、赤旗と共に無数のアナキストの黒旗が登場していたことが伝えられ、また運動のリーダーとしてその名前があがっていたダニエル・コーン＝バンディがアナキストだったことから、パリ五月革命において、アナキズムは、戦前のスペイン革命以来、久方ぶりに登場したといえよう。日本においても、アナキズムが大衆的に登場したのは一九六八年であ

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 131　08.10.3 1:54:14 AM

り、さらにそれを踏まえて、アナキズム関係の古典や研究書、評論その他が七〇年以降、次々と刊行されるようになる。その意味で、もしいってよければ、六〇年が広い意味でのトロツキズムの時代であるとすれば、六八年は同じく広い意味でのアナキズムの時代といえよう。マルクス主義者も無自覚なままアナキスト的であり、ブランキスト的といわれたブントなどはバクーニン主義的アナキストと似たようなところが多分にあった。

むろん一九六八年においてもアナキズムは周辺的であった。しかしながら周辺的にせよ、六〇年とは異なり、アナキズムの存在は半ば顕在化しており、また固有のアナキズムとは別に六八年そのものがアナーキーにしてノンセクトであり、無意識的なアナキズムの様相を帯びていた。そのような時代性ゆえか、私の経験ではアナキズムは「一九六八年」として語られる全共闘や新左翼の運動において不思議な位置と性格を持っていた。不思議というのは、一九六八年の新左翼の思想の主流は圧倒的にマルクス主義かマルクス圏の思想にあったからだ。アナキズムはそこでは異端であり、傍流であり、極少数派だったが、それだけに六八年における無意識のアナキズムともいうべきアナーキー主義は全共闘の年少派的なものだった。

日本における新左翼のルーツは、周知のように一九五六年のスターリン批判とハンガリー事件にあり、それと前後したトロツキスト・サークルを発端とし、続いて一九五八年に全学連のヘゲモニーを掌握していた学生たちが共産主義者同盟（ブント）を結成し、運動としての広がりを持つようになる。

日本のアナキズムは幸徳秋水や大杉栄というビッグ・ネームによって語られがちだが、「生き方」としてのアナキズムではなく、「運動」としてのアナキズムを見る場合は、むしろ大杉以後にこそ目を向けるべきだろう。大杉が憲兵隊に虐殺された後、その報復のために中浜哲らによりギロチン社が作られたことまでは知られているが、その後のアナルコ・サンディカリズムやそれと対立する八太舟三らの純正アナキズム、さらに党的アナキズムを志向した無政府共産党、全国に支部細胞を根のように形成し農民パルチザン的闘争を展開しようとした農村青年社などがそれだ。

戦後、アナルコ・サンディカリズム系の日本アナキスト連盟と、純正アナキスト系のアナキスト・クラブが結成されるが、現実の政治運動や労働運動に対する影響力は皆無に近く、事実上、トロツキストの初期と同じような思想研究会の域を越えることはなかった。マルクス主義の場合は、スターリン主義に対してはトロツキーの「裏切り史観」による〝救済〟があり、スターリンによ

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 132 08.10.3 1:54:15 AM

る歪曲以前のレーニン時代のボルシェヴィキに回帰し、スターリン主義による裏切りを越えたボルシェヴィキ的運動を展開するという路線が可能であり、それがブントの結成から革共同の組織展開を経て六八年に到る。そこにはロシア革命の成果のボルシェヴィキによる独占（社会革命党左派やアナキスト各派の弾圧などを通じて）という世界史的背景があったが、アナキズムの方はスペイン革命の最大勢力でありながらも、革命後の自己権力の問題をアナキストの主流は解決出来ず、スペインのアナキズムは革命と共に敗れ、崩壊した。「ドゥルティの友」グループなどアナキスト左派は、〝アナルコ・ボルシェヴィキ〟的な自己権力論に基づき、革命派のトロツキストとの連携による「革命戦争」の展開を主張したが事態を動かすには到らなかった。そのためアナキズムには勝利の遺産がなく、また敗北を総括し、新たな運動を形成する理論も確立出来ず、戦後のアナキズムは事実上、開店休業状態にあったといってもいいだろう。

私がはじめて新左翼系のメディアに書いた文章は二一歳の時の「無政府主義革命の黙示録　国家撃譲と共同体の原基」（『情況』一九七二年二月号）という百五十枚ほどのもので、私が十代の頃に大阪で体験したアナキズム運動の総括と展望を述べたものだった

アナキズムについて知ったのは一九六七年で高校二年の時だったが、当時の私の置かれた環境では、アナキズムについて書かれた著書はなく、図書館で百科事典のページをめくり「アナキズム」の項目で、はじめてその概要を知るという状態だった。ほどなくして『世界の名著』シリーズから「プルードン・バクーニン・クロポトキン」の巻が出され、G・ウドコックの『アナキズム』なども刊行されたが、大半は概論などの二次文献ばかりであり、アナキストの古典的文献の刊行については、六八年の運動が一段落を終えた、その意味では六八年の「戦後」ともいうべき一九七〇年代の前半から半ばにかけてまで待たなければならなかった。

日本アナキスト連盟の機関紙の『自由連合』の定期購読をしたが、興味をひいたのはフランスの五月革命についての報告記事のみで、低迷するアナキズムの現状に対する危機意識すら皆無の自由気ままな（つまりは脳天気な）エッセイがあるばかりだった。私は日本アナキスト連盟に代表されるような既存のアナキズムに対して限りない違和感を覚え、夜郎自大だったかもしれないが、既存のものに頼らず、自分の手でアナキズムを再興しなければならないという使命感にも似たような感情を抱いていたのだった。困ったことは、マルクス主義におけるマルクスの著書のような依拠すべき原典が断片的にしかなく、またアナキズムの立場から見た現実の分析や運動

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 133　08.10.3 1:54:16 AM

方針についても参考になる文献は皆無に近いということで、何もかもを自力でやるしかなかった。後に七〇年代初頭に私は書評新聞において「独学・独断・独行の年少イデオローグ」と紹介されることになるが、このような状態であり「独学・独断・独行」する以外に方途がなかったのが実情といっていいだろう。大学受験に失敗したため浪人生となり、一応、予備校に入学の手続きをとったが、受験勉強などやる気はまったくなく、予備校近くの全学バリケード封鎖中の大学で結成されようとしていた大阪浪人共闘会議（浪共闘）に参加したのだった。浪共闘はブント系（中央派）、解放派系（エスエル派）とアナキスト（エスエル左派）を中心に、少数のプロ軍や毛沢東派、第四インター、ベ平連からなっていた。浪共闘は大阪だけでなく東京でも結成されており、東京の浪共闘は中核派が指導権を掌握していた。

大阪浪共闘からは、暴力革命高校生戦線（プロレタリア軍団）から来て後に韓国の朴大統領暗殺未遂事件を起こす文世光や、日本赤軍の一員であり現在無期懲役で服役中の丸岡修などが出ている。一方、東京浪共闘からは、高校時代は反戦高協に属して坂本龍一らとバリケード闘争をし、その後、安倍内閣の官房長官になる塩崎恭久が出ていることからすると、浪共闘は良くも悪くも単なる受験拒否派の浪人生たちによる予備校の授業の組織的妨害のエピソードだけではなさそうだ（某予備校の近くでは、民青系の予備校生グループとの浪人生同士のゲバルトも行われたが）。

アナキスト高校生戦線や黒色高校生連盟という組織をすでに作っていたが、組織拡大のため、当時、社会党の協会派系の高校組織を見つけ、第四インター上がりというリーダーを論破して、その高校組織をほぼまるごと吸収して新たに結成したのがアナキスト高校生連合（アナ高連）のはじまりだった。アナ高連は、その後、市内のいくつかの高校に支部を形成し、また赤軍派の高校生組織と共に高校の全校バリケード封鎖闘争を展開し、さらに東京のアナ高連と共に全国組織化の方向をとった。そして関西ブント以来の〝関西復権〟史ではないが、アナ高連のヘゲモニーもまた関東（東京）ではなく、関西（大阪）にあった。

この頃、大阪、京都、神戸などの関西のアナキストが大同団結し、一定の規模を持った組織を形成し、マルクス主義の党派と拮抗する形で学園闘争や労働運動を展開しようという動きがあり、関西の主要大学その他のアナキスト・グループが結集し、結成されたのがアナキスト革命連合（アナ革連、ＡＲＦ）だった。アナ革連は「アナキスト・ブント」あるいは「黒色ブント」と徒名されたが、その特質は、アナキスト一般ではなく、バクー

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 134 08.10.3 1:54:16 AM

ニン主義的な組織として固有の党派的組織だったことにある。つまり研究会の延長にあるようなサークル的組織ではなく、マルクス主義者なら前衛党に該当する革命組織を志向する同盟として結成されたのだった（アナキストにとって「前衛党」という言い方は忌避すべきものであったため使用されず、また組織名称については「同盟」案と「連合」案があり、最終的には後者となった）。

アナ革連はまだ未参加のアナキスト・グループに対しては積極的なオルグ活動や論争を行い、場合によっては他のアナキスト・グループとのゲバルトも辞さなかった。例えば非暴力直接行動論で知られた向井孝のグループの集会を粉砕し、京都の立命館のアナキスト・グループとも執拗な対立を繰り返した。その結果、関西地区のアナキストは、アナ革連系と非アナ革連系諸グループに二分解される構図となり、非アナ革連系のグループは、アナ革連に対して陰に陽に「アナルコ・ボルシェヴィキ」あるいはそれを略して「アナシェヴィキ」という批判や誹謗を繰り返した。東京の日本アナキスト連盟やその周辺の旧態依然としたアナキストたちには「アナルコ・ボルシェヴィキ」などとんでもないことであり、彼らの一人は、アナ革連を、マルクス主義者の偽装組織であるとまで言い出す始末だった（マルクス主義者にそのようなものを作る必要などどこを探しても見つからないにもかかわらず）。そのゆえか、その後、東京中心的に記述された戦後アナキズム運動史には、アナ革連は登場しないか、そのようなものがあったという程度の矮小化した記述があるにすぎない。

しかしながら関西におけるアナ革連の勢力は圧倒的だった。アナキスト・グループといえば、通常、数十名前後だが、アナ革連は五百人以上の構成員を擁し、ゲバルト専用部隊まで有していた。また大阪の幾つかの大学の全共闘はアナ革連の影響下にあり、アナ革連のゲバルト部隊が常駐し、キャンパスには無数のアナキストの黒旗が翻り、さながらアナキストの兵営とでもいうようなというところもあった。ブントや赤軍派の一部とは交流があり、マルクス主義党派との提携も進めていたが、必要ならばゲバルトも辞さず、特に純トロツキスト系の組織の場合は、クロンシュタットやマフノの報復という感情がなきにしもあらずというのは事実だった。またアナ革連も東京に「支部」（名称は「無政府共産主義者同盟」）を設置し、アナルコ・サンディカリストと純正アナキスト、それに無数のノンセクト主義からなる東京のアナキズム状況への革命的介入も志向していた。

先に、アナキズムは「全共闘や新左翼の運動において不思議な位置と性格を持っていた」と書いたが、それはどういうことかというと、私の経験からだが、どこへ

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 135　08.10.3 1:54:17 AM

いってもアナキストは敵視されたり批判されることがなかったということだ。アナキストというと第一インターやロシア革命、スペイン革命あるいは幸徳秋水や大杉栄というような過去のイメージが強かったためか、歴史の過去からタイムマシンにでも乗って馳せ参じて来た歴史的援軍であるかのように歓迎される方が多かった。それは、現実にはアナキズムそのものが、総体として「アナキスト派」とでもいうように一つの弱小党派の思想のように解され、マルクス主義者からすればその影響力など取るに足りないと思われたからかもしれない。事実、戦後日本のアナキズムは、思想においても運動においても半人前だったことは否定出来ない。また、世界的にはスペイン革命以来、低迷を続けてきたことによる革命運動全般の現在的状況に対するタイムラグが、現在に追いつくために運動史の復習をせざるをえなかったところもあったと思われる。スペインのアナキスト左派の「ドゥルティの友」のように党派的アナキズムを志向したアナ革連などはその典型だろう。また、かつてはプロレタリア独裁を主張し、スターリン主義を生み出したマルクス圏の思想が、スターリン主義の問題に対してそれまでのようなトロツキーでは駄目であり、ローザもレーニンも駄目であるばかりかマルクスでさえ無謬ではないという認識に到ったというマルクス主義者の状況もあろう。

最近は、マルクス圏の思想においてプルードン的なアソシエーション論の展開をはじめ、以前ならばアナキズムとおぼしき様相を見せているが、それは大きな目で見ればアナキスト革命連合が、運動史の復習としてアナルコ・ボルシェヴィキ的展開を見せたことと好対照の現象であるということも出来よう。そしてアナキストでありながら黒色ボルシェヴィキ的なアナ革連の見方によっては矛盾した在り方こそ、ある意味では党派と全共闘を一身に体現したという意味で一九六八年的なものといえるだろう。

三

六八年の全共闘や新左翼の運動は、戦後秩序に対する批判であり否定の運動だった。今でも、まことしやかに全共闘や新左翼の運動は「学園民主化」や「反戦平和」を志向したものだったと語りつがれたりしているようだ。しかし、実際はそうではなく、六八年の闘争は、学園民主化を批判し、革命戦争を志向していたのである。それを端的に示すものが六八年の「戦後民主主義批判」の思想だろう。むろん、この戦後民主主義批判は様々に受けとめられ、そのものとしては曖昧だったが、総じて、戦後民主主義を欺瞞的なものと批判し、「真の民主主義」を求める傾向（真の民主派）と、戦後そのものを批判す

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 136 08.10.3 1:54:18 AM

る傾向（反戦後派）を両端として、多くはその中間で濃淡的に存在していた。全共闘の年少組において無意識のアナキズムがファシズムと遭遇するのはここだった。つまり、それは単なる反戦後ではなく、戦後を体験した反戦後であり、戦後民主主義を経験しての戦後民主主義批判なのである。それゆえ、その反戦後は、戦前回帰ではなく、もう一つの戦後を孕むものであり、あるいは、その反戦後は、戦後以後を志向するものであり、国粋的な右翼の戦前回帰的な反戦後との違いもここにある。

全共闘の年少派の精神的環境は次のようなものだろう。すでに述べたように、年少派においては左翼イデオロギー（マルクス主義）の絶対性は崩壊しており、脱左翼化しつつあるものの現状否定のニヒリズム色の強い革命派であった。脱左翼的革命派として右翼にも関心を示すことはあったが、国体護持的な右翼ではなく、国家革命派の右翼であり、同時代的には、かろうじて作家の三島由紀夫くらいであり、他は、戦前の北一輝など過去の歴史的存在ばかりだったろう。その理由は、当時は、右翼といえば、学校当局の手先となってスト破りをする「関東軍」と俗称された権力の傭兵的手先のようなものでしかなかったからだ。

全共闘の年少派にとっては、その反戦後的立場にさらに「戦争」と「軍」が加わることになる。戦争と軍を提起し実行せんとしたのはいうまでもなくブントの赤軍派だった。赤軍派は一九六九年一月の東大安田講堂攻防戦の結果から、鉄パイプと火焔瓶では権力との実力闘争には勝利しえないと分析し、武装をエスカレートさせ、革命軍による革命戦争という構図を開陳した。軍と戦争という方向は赤軍派だけではなく、ブントの他派にも「共産主義突撃隊」論による戦争路線があり、ブント以外でもそれに近い軍事路線の党派もあったことはいうまでもない。

軍と戦争の問題は、単に軍事論や戦争論に留まるものではなく、それはまた反戦後的存在の思想でもあった。なぜなら本音はともかく、建前として戦後は、軍と戦争を否定して存在しているのであり、軍と戦争は、戦後の外部だからである。

このような「軍」と「戦争」の問題も、年長派と年少派ではいささか趣が異なることになる。年長派にとっては、それはあくまでも左翼イデオロギー（マルクス主義）に基づくものであり、軍と戦争は左翼的「政治」の指導下に置かれ、その軍や戦争のイメージは、ボルシェヴィキ初期のトロツキーの赤軍時代であったり、キューバやゲバラなど第三世界での左翼社会主義のものだろう。むろん年少派の場合も、さほど異なるわけではないが、左翼イデオロギー（マルクス主義）という縛りが崩

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 137　08.10.3 1:54:18 AM

れているだけに、軍と戦争が固有の自己「政治」を確立し、非左翼的な軍と戦争にも開かれていることになる。年少派の軍と戦争との関係について見る場合、年少派の父親もまた戦争からの帰還将兵だったことも考えるべきだろう。すでに述べたように私の父親もそうだが、父親の日々の生活慣習には軍隊生活の痕跡が色濃く残っていた。父親からは軍隊についての否定的な話は聞いたことはなかった。戦場の地獄絵図と奇跡的な生還を体験しているが、それらについても否定的な話はなく、戦場でのサバイバル話が圧倒的だった。そのためか私は、軍隊に対しては、野間宏の『真空地帯』的な批判の視点はなく、むしろ男らしい愉快な団体生活と思うような〝軍国少年〟もどきとなっていた。小阪修平は、その全共闘本の中で、少年の頃の一種の〝軍国少年〟的体験について触れているが、彼が読んでいたという戦記雑誌の『丸』は、私も愛読しており、小阪と似たような経験がある。それについていえば、かつて「戦争を知らない子供たち」という歌があり、その「子供」とは、六八年の世代になるが、私に言わせれば、この世代は、戦争帰りの父親の背中を通じて戦争の痕跡や匂いに接しており、むしろ、「戦争を知る最後の子供たち」というべきだろう。そしてこの戦後の季節外れの〝軍国少年〟的感覚が、六八年の学生運動において組織的活動や戦闘性の基礎となったところもあったと思われる。

ところで六八年は、日本だけでなく世界の戦後民主主義においても一つの変化を思想にもたらしている。それは、戦後民主主義においてはタブーとされてきた思想の〝解放〟だった。いうまでもなく戦後において〝タブー〟とされたのはファシズム関連の思想である。戦後においても、それらの批判的研究はあったが、批判を越えた研究は問題外だった。しかし、戦後民主主義に対する批判は、それを可能としたのだった。

例えば、フランスでは、対独協力派ファシストのピエール＝ドリュ・ラ・ロシェルやロベール・ブラジャック、リュシアン・ルバテなどの著作が復刊され、ピエール・アンドリューの大部のドリュ伝やロバート・スウシーのドリュ論、ロバート・タッカーのブラジャック論など個別研究にも拍車がかかることになる。英語圏では、ローマからイタリア・ファシズムの対外宣伝放送に従事した詩人のエズラ・パウンドや『ヒトラー崇拝』の著者でもあり、「ナチのスパイ」とされた作家のウィンダム・ルイスが復権している。ウィンダム・ルイスについては、マルクス主義文芸批評家のフレドリック・ジェイムソンによる『モダニストとしてのファシスト』という研究などはあったが、ジェフリー・メイヤーズなどの本格的なルイス伝や論が登場するのは六八年以降であ

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 138 08.10.3 1:54:19 AM

る。ドイツでは、戦後、常に論争の的になったエルンスト・ユンガーの私設秘書をしていたこともあるアルミン・モーラーが「保守革命（保守的革命）」という概念によって非ナチ的な極右や右翼の精神的救済をしていたが（Armin Mohler: *Die konservative Revolution in Deutschland 1918–1932.*）、六八年以降になると、書店の店頭に保守革命の代表的イデオローグとされるアルトゥール＝メラー・ファン・デン・ブルックの『第三帝国』が並んでいたりすると、かつて清水多吉がレポートしていた。またナチとの関連のみが取沙汰されがちだったエルンスト・ユンガーについても、その作品研究が本格化することになる。日本でも橋川文三の『日本浪曼派批判序説』は一九六〇年に書かれているが、日本浪曼派や保田與重郎に対する本格的な考察が多くなるのは六八年以降だろう。橋川に『日本浪曼派批判序説』を書かせた背景には、保田の読書体験もさることながら三島由紀夫の存在があったことは知られているが、三島の背景には、橋川のいう日本浪曼派よりも、ある意味ではより過激であり、敗戦時、任地のジョホールバールで陸軍中尉として自決している蓮田善明がおり、蓮田が三島に及ぼした影響を勘案すべきだろう（拙稿「蓮田善明・三島由紀夫と現在の系譜　戦後日本と保守革命」『東大陸』第三号）。

アルミン・モーラーは、ホフマンスタールが一九二〇年代末のミュンヘン大学の講演で用いた「保守革命」の語を使用して戦間期ワイマール時代の非ナチ的な右翼や極右、保守を位置づけたが、保守革命左派とでもいう思想や運動の潮流として「国民ボルシェヴィキ（民族ボルシェヴィキ）」がある。保守革命はともかく国民ボルシェヴィキについては、わが国ではほとんど未紹介だが、オットー・エルンスト＝シュッデコップの詳細な国民ボルシェヴィズム史によれば、それはワイマール時代の革命を求めた左右の接近であり連携であった（Otto Ernst-Schüddekopf: *Die Nationalbolschewismus in Deutschland 1918–1933.*）。ナチスは自らを「国民社会主義者（Nationalsozialist）」と称したが、ナチスもまた、この国民ボルシェヴィズムの一つといってもよく、また左翼ではドイツ共産党のハンブルク支部が党本部から独立して国民ボルシェヴィズム路線に立ち、ドイツ・オーストリア合併による「大ドイツ・レーテ」構想を提出している。

国民ボルシェヴィズムの基本的立場は、反西欧であることにおいて国民的（民族的）であり、反帝国主義であることにおいて親ボルシェヴィキだったが、その一派で、エルンスト・ユンガーも当初はそのイデオローグの一人だったと推察される義勇軍エアハルト旅団系の後継組織（オリンピア・ブント。外相ラーテナウや蔵相エル

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 139　08.10.3 1:54:19 AM

ツバーガーを暗殺した地下武装結社「コンスル＝執政官」もその一つ[註1]）は、「真の第三帝国」の名の下に、アングロサクソン的帝国主義の植民地である第三世界の被抑圧的民衆との国際的な連帯のスローガンを掲げていた。戦後、ファシズムというとナチス体制やムッソリーニ体制ばかりを連想し、独裁と全体主義的抑圧ばかりが強調されるが、ファシズムはワイマール時代のドイツにおいては、国民ボルシェヴィズムとして、第三世界の被抑圧的民衆の反帝国主義的な連帯と解放を主張していたのである。国民ボルシェヴィズムは、社会主義的国民革命の暴力革命路線であり、議会主義のナチスとは対立するようになり、ユンガーの友人であり国民ボルシェヴィズムの代表的イデオローグでもあるエルンスト・ニーキッシュはナチスをドイツ革命の敵として激しく批判した（ニーキッシュはその後、ゲシュタポに逮捕され、強制収容所で敗戦を迎える）。

戦後のドイツではイスラエルや周辺諸国からの思想監視状態からナチスやファシズムは弁明不可の絶対悪とされているため、国民ボルシェヴィズムはファシズムではなく「極右の左派」と規定され、ナチスやファシズムの絶対悪からの独立的存続を保証されている。アルミン・モーラーは、ヒトラーとナチス主流に抵抗したナチス左派（革命的ナチス）のリーダーのオットー・シュトラッサーを「ナチのトロツキー」と形容しているが、それに擬えれば極右の左派としての国民ボルシェヴィキは、ファシスト左派とでもいえるだろうか。

六八年の年長派が、左翼革命派としてボルシェヴィキ的でスターリン主義者であるならば、年少派は、脱左翼革命派として、このような国民ボルシェヴィキ的ファシスト的なものへの可能性を持っていよう。

（註1）第一次世界大戦直後は、ドイツ革命を弾圧する部隊として旧軍隊の志願者から結成された義勇軍（フライコール）は、当初はローザ・ルクセンブルクを殺したり、ミュンヘン・レーテ圧殺に出動し、「ナチの先駆」（Robert G. L. Waite: *Vanguard of Nazism. The free corps movement in postwar Germany.*）といわれたりもした。しかし大尉・中尉・少尉など青年将校の下に無数の徒党的部隊を編成し、バルト諸国やチェコ国境のアンナベルクの丘など勝手に戦闘を求めて国境地帯を自由に行き来し、政府の解散命令も無視したそのアナルコ・ニヒリズムが政府の頭痛の種でもあった義勇軍は、ドゥルーズ／ガタリのいう「戦争機械」（『千のプラトー』）といえよう。

四

エアハルト旅団やその後継組織の「コンスル（執政官）」の一員だったエルンスト・フォン・ザロモンは、「我々は国民の幸福のために闘っているのではない。国

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 140 08.10.3 1:54:20 AM

民に一つの宿命を負わせるために闘っているのだ」（*Die Geächteten*）と書いているが、ここでザロモンのいう「宿命」とは、いうまでもなく歴史的なものだろう。幸福が現在的なものであるなら、宿命は歴史的であり、そして現在は非歴史的であり、歴史は非現在的だ。

戦後という現在に対する反戦後の闘争とは、まさに現在の幸福（戦後の平和）を否定し、歴史の宿命を呼び寄せることになるだろう。その意味で、反戦後の軍と戦争の立場は、戦後という「歴史の空白期」を挟んでの歴史の再開・継続となろう。再開される「歴史」とは何か。いうまでもなく、戦後以前の現実だった戦争である。ここにおいて、二つの現実が、南北朝のように存在することとなる。「戦後」としての現実と、「戦争継続」としての現実である。

いうまでもなく戦後は、戦争終結（終戦、敗戦）を正当化してきた。その正当化の内実は、ザロモンのいう「国民の幸福」の立場だろう。しかし、この「国民の幸福」は、それまでの現実（戦争継続）を否定した路線転換の産物である。分かりやすくいえば国家の転向だ。吉本隆明の転向論の論理を適用すれば、この国家の転向も肯定出来るだろう。吉本はその転向論において宮本顕治の非転向を大衆からの孤立によって可能になったものにすぎないと批判し、中野重治の主体的な転向を評価した。吉本の転向論の要諦は、転向が権力からの弾圧によるものではなく、知識人の大衆からの孤立というところにあった。つまり、大衆から孤立していては知識人は食えないということだ。それに擬えれば連合国的な現実に挑戦した日本は、連合国の大衆世界から孤立し、食えなくなったということである。ところで吉本の転向論には、知識人の大衆からの孤立と共に、もう一つの孤立が前提とされている。それは日本の大衆の世界史的孤立というものだ。その意味で日本には脱出口がないというわけである。これは国家の転向に言い直せば、日本は所謂ＡＢＣＤ包囲網に取り囲まれ、それを打破すべく戦争を開始するが、利あらず包囲網は打ち破れず、軍資金や兵糧もなくなり、徹底抗戦は辞め方向転換し降伏したということになろう。

しかし本当に日本は孤立していたのだろうか。確かに日本はＡＢＣＤ包囲網により取り巻かれ、閉鎖的な状態に置かれていた。だが、ＡＢＣＤ包囲網の外に味方がいたのではなかったか。つまり、日本は孤立して単独で連合国的世界を相手に戦争をしたのではなく、日独伊三国同盟を結び、ＡＢＣＤ包囲網の外に、ドイツ、イタリアという外部があったのではないか。これまで日独伊の枢軸については、政治外交史的な見方しかなく、それの持つ思想的な意味については一顧だにされることはなかっ

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 141　08.10.3 1:54:21 AM

た。いうまでもなく左翼にとっては、ドイツやイタリアというファシストとの連携に思想的意味などあるはずはなく、右翼にとってはドイツやイタリアのようなファシストと一緒にされたくないという、日本一国主義的な共通性があったからだ。吉本の立場もまさに日本一国戦争論であり、そこに吉本的自立と右翼的国粋との密通構造が成立する所以もあるが、吉本がアラブへ向かった日本赤軍を捉えられなかったのもそのためである。吉本は連合赤軍については、旧日本軍の軍律問題から旧軍の精神的亡霊問題を指摘したが、日本赤軍については「ドロップアウト」としか捉えられなかった。つまり彼は、日本赤軍という日本史にとってのレバノンのベッカー高原の意味が分からなかったのである。日独伊三国同盟が日本にとって「海外盟邦」という外部を持つことだったとするならば、そこへの転戦、あるいは後退、亡命が可能だということだろう。第二次世界大戦中、それぞれの戦域が遠く離れながらも、日本とドイツは連合国の制海権下の海域を潜り抜け、相互に潜水艦による交流を行っていた。インド独立運動の闘士としてドイツで自由インド軍団を組織してイギリスと戦っていたスバース・チャンドラ・ボースが、ヒトラーの快諾を得、Uボートでインド洋へ向い、そこでドイツ潜水艦から日本潜水艦に移り、日本へ来たこともその一つだろう。チャンドラ・ボースが、日本の外部からの来訪者（亡命者）だったならば、日本赤軍は日本から外部へ向かった（亡命した）といえるだろう。それは吉本がいうような「ドロップアウト」ではなく、地球的規模での「吉野」（京都の北朝に対して、後醍醐帝の南朝の国内〝亡命〟地）ともいうべきベッカー高原に逃れた「日本史」なのである。日本赤軍が単なる一個の政治組織のレベルを越えて「日本史」的存在であるのは、彼らが「軍」であり「戦争」を継続し、その意味において戦後以前の戦争の継承者だからだ。そしてベッカー高原が、外部としての「吉野」（日本の正史の在所）である所以は、日本の戦争が、日本一国のものではなく、ドイツ、イタリアという海外盟邦を持っていたことにある。

第一次世界大戦と比較した場合の第二次世界大戦の特質は、戦後のドイツにおけるニュルンベルク裁判と日本における東京裁判という軍事裁判にあるだろう。これは連合国側からすれば、ドイツと日本を東西の基軸とする枢軸国側の「戦争犯罪」を裁くものだった。この裁判については、事後法による裁判であるという批判があるが、それはともかくとして、戦争犯罪を裁くということは、連合国側の認識において連合国が「警察的」陣営であり、枢軸国が「犯罪者」集団、あるいは昨今風にいえば「国際的テロリスト」集団ということであろう。まさ

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 142 08.10.3 1:54:21 AM

に日独伊の枢軸こそ、「悪の枢軸」なるもののルーツともいえるのであり、第二次世界大戦とは連合国側からすれば、世界的な規模での日独伊という「悪の枢軸」が行う「テロとの戦い」であったことになる。これは裏を返せば、連合国が現状維持の「反革命」陣営であり、枢軸国が現状変革の「革命」陣営であることでもあろう。日本にはパール判事の言葉を引用した日本無罪論が今でもあるが、革命日本は確信犯的有罪論の立場に立つべきだろう。

六八年は、軍と戦争という戦後の外部において、戦後以前としての枢軸国の戦争と遭遇することとなる。そしてそのことにより六八年は日本における歴史的正統性（正史）を獲得するのである。なぜなら戦後は国家の転向だからだ。そのような国家の転向を否定する精神として登場した存在に三島由紀夫がおり、国家の転向としての戦後の否定において三島と六八年は出会うのである。三島と六八年の相違は、戦後的現実に対する三島の一人本土決戦的な「自決」と、六八年の海外盟邦への「亡命」の違いにあるだろう。かつての戦争でいえば、三島は本土決戦に関連し、六八年は日独伊枢軸と亡命による徹底抗戦を続けるということになろう。いうまでもないが、ドイツは先に降伏したという年表的時間は問題とはならない。ドイツとは海外盟邦の普通名詞でもあるからである。

日本の戦争はアジア解放の戦争であり、それは明治以来の日本の存在被拘束性でもあった。日本はその国家の存在そのものがアジアにおける民族独立の革命国家だったのであり、アジア解放は、そのような日本の前提でもあったのだ。そしてそれは日独伊の世界戦線に媒介されることによりアジアにおける世界革命戦争の様相を帯びるのであり、六八年の年少派は、その軍と戦争において[註2]アジア解放としての世界革命戦争に出会うのである。

（註2）日本の戦争のアジア解放的内容については、拙稿「日本的前衛とアジアの大衆。アジア主義の革命と戦争」（『情況』一九九七年八・九月号）を参照されたい。ちなみに同文はネットにおいてもWeb再録されている（http://www.linelabo.com/Asian_principles_01.htm）。

五

アジア解放やファシズムといえば左翼というより右翼のテーマであり、右翼の問題圏に属するものだろう。日本の右翼は、明治期の玄洋社や黒龍会などの古典的右翼から昭和期の超国家主義的な右翼に到るが、昭和維新を掲げた超国家主義的右翼はたとえば北一輝をはじめしばしばファシズムとされる。しかし日本でファシストといえば中野正剛と東方会だろう。中野正剛と東方会は全

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 143　08.10.3 1:54:22 AM

国的な党的組織を形成し、その党旗や腕章、制服などから「ナチス紛い」と揶揄されたことは知られていよう。中野の出自は玄洋社にあり、その意味では中野は正系の右翼でもあるが、政治的出自は大正デモクラットでもあり、そこに中野のファシストたる所以もあるかもしれない。ところでかつて吉本隆明は「日本ファシストの原像」と題する文章で北一輝と中野正剛を比較して中野を批判したことがあったが、吉本の中野批判がまったく駄目なのは、「思想家」の北一輝と、「政治家」の中野正剛の言葉をそのまま比較しているところだろう。思想家の言葉と政治家の言葉を同一の平面で比較出来ないことはいうまでもなく、それをあえてした吉本の中野批判の背景には、吉本の論争相手だった花田清輝が東方会に関係していたことがあったと思われる。北は二・二六に関係づけられ死刑となり、中野は戦争の後半に東條批判を展開し、倒閣の動きを見せたことから検束され、その後、自決するが、北や中野のような存在が消えた後、右翼には国粋的なものしか残ってはいなかった。戦後の右翼は、そこから出発するが、六〇年安保の時の反共抜刀隊の例に見られるように権力の手先として登場した。一九六八年においてはバリケードに対するスト破りの「関東軍」と呼ばれた当局の手先として存在した。しかし、右翼における一九六八年もあったのであり、反共ではなく民族であり、権力の手先ではなく右からの革命の意識の登場だった。いうまでもなく全共闘や新左翼の影響であり、右翼もまたアナキストの対極で時代と共にあったのである。

最初に右翼的な声をあげたのが、生粋の右翼というより作家の三島由紀夫だったということは、戦後右翼の現状を示しているともいえるが、三島の影響下に右翼の学生組織においても、単なる反共や反左翼ではなく、民族や右翼革命（維新）を模索しようとする流れが生まれてくる。早稲田の国策研を基盤とした日本学生会議（ＪＡＳＣＯ）などがそうであり、彼らは戦後のヤルタ・ポツダム体制打破のため、対米従属から日本の民族的独立を主張し、そのため右翼に多い既存の政権への訴え（請願）ではなく、端的に既存政権なり国家を打倒するための戦術としてのアナキズム、運動としてのボルシェヴィズムも辞さないという民族革命に立った。その結果、他の右翼（国粋系の右翼）からは親新左翼的なファシストと見なされることにもなる。

早稲田においては、日本学生会議は、〝民族派全共闘〟として早大全共闘に参加していたが、民族派の学生組織においても数は少ないとはいえ、右翼同士の内ゲバも展開されており、その代表的なケースが日本学生会議（ＪＡＳＣＯ）と日本学生同盟（日学同）の早稲田派の

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 144 08.10.3 1:54:22 AM

内ゲバだろう。その発端は、反核防条約闘争への参加をめぐるものだった。民族派右翼は、日本の民族的独立は自主武装はもとより核武装も含まれると考え、核拡散防止条約は民族独立の楔であると捉え、反核防闘争を提起したのであり、それはある意味では左翼における反安保闘争に匹敵するものだったともいえよう。日学同統一派（名称こそ統一派だが、日学同の分派）は反核防闘争に参加し、日学同早稲田派（日学同の主流派）は参加を拒み、その結果、反核防条約闘争を担ったのは、中心的存在だった日本学生会議、そして日学同統一派、さらに全国学協の三派であり、後に、この反核防の三派こそが戦後日本における民族派のはじまりとされる。

この反核防条約闘争の意義は、戦後の右翼において、はじめて啓蒙レベルの活動を脱する組織的運動として展開される内実を提起したことだろう。右翼は現在でも所謂「街頭右翼」の街宣車による活動の印象が強いが、あれは何かというと啓蒙活動にほかならない。そこで彼らが主張し、訴えているテーマや問題が何であれ、それは彼らからすれば〝真実〟を知らしめる啓蒙活動であるのだ。右翼にはもう一つ山口二矢の社会党委員長浅沼稲次郎暗殺や野村秋介や元楯の会一期生の伊藤好雄らによる経団連突入などのテロや実力行使がある。しかし、これらも行為の種類はともかく性質は、啓蒙活動のレベルにあるといえるだろう。すなわちそれらは「警告」であり「警鐘」なのだ。このような中で反核防闘争は、戦後の右翼において、たとえそれがどの程度のものであるにせよ啓蒙レベルを越える運動としての意義を持つだろう。また右翼風俗面でいえば、反核防条約闘争に結集した民族派の学生組織は、黒ヘル姿で日章旗と黒旗を掲げ、日章旗さえなければ新左翼と見紛うような出で立ちで、これまた新左翼を思わせるような街頭デモをしたのだった。また新左翼ならば集会の最後に「インターナショナル」を歌うが、彼らはそれに相当するものとして三上卓の作詞で知られる「青年日本の歌」（昭和維新の歌）を歌っている。当時の右翼はまだ「軍艦マーチ」一色であり、戦後の右翼で「青年日本の歌」をはじめて組織的に歌ったのは反核防闘争の三派だろう。

しかし、この反核防三派も、その構成メンバーたちの大学卒業や全共闘や新左翼の運動の低迷化と共に運動は後退し、右翼は再び、それ以前の啓蒙レベルの活動へと後退する。

ところで右翼の現代的テーマはいうまでもなく天皇論だろう。ソ連の崩壊が左翼を崩壊させたように（マルクス主義新左翼は「反スタ」を掲げていたが、トロツキーの「労働者国家擁護論」ではないが、やはりソ連スターリン主義の存在に依存していたところもあった）、右翼

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 145　08.10.3 1:54:23 AM

は昭和天皇の死により、変革論（昭和維新論）も天皇論も失ったといえる。天皇論がなければ国体護持も文化防衛も平成維新も何もあり得ない。その意味では、昭和右翼の残存はあるかもしれないが、平成時代の右翼は存在しないといえるのではないか。

天皇論に関していえば、戦後、丸山眞男は日本ファシズム論において周知のように戦前の日本は責任主体が不在の無責任体制であると批判した。しかし天皇が主体的意志を持たなかったからこそ、西欧と比べるならば日本的な偏差があるとはいえ、公共性（「臣民的公共性」）が形成されたといえる。つまり、丸山が批判した点において、丸山の主張とは逆に日本は近代となり得たのだ。繰り返すならば、皇室制度（天皇制）の存在と、天皇が主体的意志を持たなかったことが、日本の近代の秘密なのである。そして右翼的な言い方をするならば、皇室制度（天皇制）を否定したならば、日本は経済的価値がすべてを支配する守銭奴国家になり、天皇が意志を持つならば公共性を喪失するだろう。右翼に人士がいるならば、このあたりから現代の天皇論が可能になるのではないか。

六

亡くなる直前に廣松渉が『朝日新聞』に発表した「東北アジアが歴史の主役に」と題されたアジア主義的な文章が物議をかもしたことは知られている。

廣松は、次のように言う。

「新しい世界観や価値観は結局のところアジアから生まれ、それが世界を席巻することになろう」「単純にアジアの時代だと言うのではない。全世界が一体化している。しかし、歴史には主役もいれば脇役もいる。将来はいざ知らず、近い未来には、東北アジアが主役をつとめざるをえないのではないか。」「東亜共栄圏の思想はかつては右翼の専売特許であった。日本の帝国主義はそのままにして、欧米との対立のみが強調された。だが、今では歴史の舞台が大きく回転している。日中を軸とした東亜の新秩序を！　それを前梯にした世界の新秩序を！　これが今では、日本資本主義そのものの抜本的な問い直しを含むかたちで、反体制左翼のスローガンになってもよい時期であろう。」（『廣松渉著作集』第十四巻）

廣松はファシズムについて積極的な言及をしていたマルクス主義者といえよう。積極的とは、ファシズムに対する公式左翼的な批判ではなく、ファシズムを内在的に批判しようとする視点である。例えば「全体主義的イデオロギーの陥穽　ファシズムとの思想的対質のために」という文章がある。その冒頭で廣松は次のように問題提起をしている。

「ファシズムの全体主義思想は従前、理論的・思想的

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 146　08.10.3 1:54:24 AM

次元の問題として真摯に検討されることが少なかったように思われる。けだし「ファシズムは理論的・思想的には取るに足らぬ」という暗黙の了解が支配的である所為であろう。だが、ファシズムは、果たして水準以下的な思想であろうか？　近代合理主義や近代デモクラシーに安住している凡百の〝思想〟よりも、それは却って思想的水準が高いのではないか？」（『マルクス主義の理路』）。

そして今や「思想としてのファシズムを虚心坦懐に検討し、自らの足許をも見据えつつ真摯に対質すべき局面に際会している」のだと言う。この中で廣松は、ハイデガーやカール・シュミットをはじめとする「第一級の学者・思想家たちも多数ファシズムにアンガージュしている」ことをあげ、「インテリ層がたとえ思想的に錯乱し自己欺瞞に陥ったのであるとしても、そこにはしかるべき思想的自己了解の内在的論理が介在していた筈であって、これの究明を抜きにした単なる〝精神分析〟ではファシズム論の名に値しえない筈である」といい、思想としてのファシズムの再検討が必要だという。

今日からみれば、廣松のこのファシズム論は明らかに準備不足の感が否めないが、それはともかく廣松はファシズムを近代的個体主義のアンチ・テーゼと捉え、それに対しては肯定的な評価を下している。廣松はまたラインハルト・キューンルの『ナチス左派』（Rheinhard Kühnl: *Die nationalsozialistische Linke 1925–1930.*）をふまえ、「ナチ党左派は、最後まで社会主義的志向と政策をもちつづけた。ナチ党左派は、ヴェルサイユ体制の打破を志向したソ連との協力を主張し、王室財産の没収問題に関してはドイツ社民党や共産党との協同を考え、また、必ずしも人種主義や民族主義に凝り固まっておらず、ドイツ・ナショナリズムの帝国主義的政策に対する反対闘争を志向し、被抑圧民族のインター・ナショナルな連帯を主張していたといわれる」と紹介している。「ナチス」という呼称は現在では第三者的呼称として使用されているが、元は敵対者からの蔑称であり、ナチスは自らを「Nationalsozialist（ナツィオナル・ゾチアリスト、ナショナル・ソシアリスト）」、つまり「国民社会主義者（国家社会主義者）」と称していた。ナチスは「党綱領の社会主義的志向を空洞化せしめたヒットラーのヘゲモニーのもとに権力の座についた」（廣松前掲書）が、だからといってヒトラーやナチス主流が社会主義者ではなかったとはいえないとして、わざわざ註に「『我が闘争』ではともあれ「国家主義と社会主義の結合」を強調しており、遡っては、ナチス党綱領を初めて大衆の前に公表・解説したのも彼であるから、「ヒットラーは最初から反社会主義者であった」という説はそのまま肯んじるわけには

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 147　08.10.3 1:54:24 AM

いかない」と書いている。

廣松によれば、近代個体主義の批判と超克の立場においてファシズムとマルクスの思想は同じであるという。両者に違いがあるとすれば、ファシズムは〝個人〟に対する〝社会〟を実体化するがマルクスはそうではなく、「ファシズムの全体主義は、社会というものが諸個人の代数和ではないということを主張する限りでは正しいとしても、マルクスを援用していえば、社会というものを諸個人の現実的な関わり合いの機能的聯関の総体として把握せず、それを自存的な実体に仕立て上げ」ており、「近代個体主義の社会観が、成員の間主体的intersubjektivな関わり合いの「項」を実体化する錯視に陥っているのに対して、ファシズムの全体主義的社会・国家観は、当の聯関の総体を実体化してしまう物象化的錯視に陥っており、まさしくこの点に全体主義イデオロギーの誤謬の根幹がある」（廣松同右）のだった。煩雑を厭わず廣松の言説を紹介したのは、廣松のファシズム批判論が、ファシズムの肯定性の内在的止揚とでもいうような論理構成をとっていることを示唆したかったからだが、これは廣松のファシズムに対する姿勢を見る上で看過出来ないことだと思われる。このようなファシズム批判を、戦前の日本思想に対して展開したものが『〈近代の超克〉論　昭和思想史への一視角』だろう。ここでも廣松は、戦後に流布している戦争期の日本において資本主義批判はタブーであったかのようなイメージがあるが、それは誤りだという。「在野の日本ファシスト諸グループが「資本主義の打倒」を綱領に掲げていたことは措くとしても、陸軍の主流「統制派」や当時のいわゆる「革新官僚」においても、旧来の資本主義に対する一定の批判にもとづいた〝革新〟が志向・表明されていたのであり、資本主義に対して批判的言辞を吐くことは、それ自体としては決してタブーだったわけではない」といい、戦争期の座談会「近代の超克」をとりあげ、京都学派の思想に対する内在的批判を展開している。廣松がファシズムに対して異例なまでに内在的批判の姿勢をとっているのは、近代的世界観の超克をいう廣松にとってのハイデガー問題があるからかもしれないが、廣松のファシズム批判は、近代（近代個体主義）に対する批判においてはファシズムと同じ戦線に立とうとしているのである。つまり廣松は、戦後の凡百のファシズム批判に対して、新左翼の革命理論の対抗馬となり得ると認識し、ファシズムの思想的オルグを図ったということも出来、「東亜の新秩序」「世界の新秩序」の思想の左翼的奪還をいう廣松の言辞は裏を返せば、その思想的可能性を見抜いており、ファシズムにこそ現代の革命思想の現場があると認識していたことでもあるだろう。 **情**

KAN01_09_CHISAKA_NEW.indd 148　08.10.3 1:54:25 AM